

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 5 月 22 日現在

機関番号：13802

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520538

研究課題名(和文) 中英語における時空間体系

研究課題名(英文) Spatio-temporal systems in Middle English

研究代表者

中安 美奈子(Nakayasu, Minako)

浜松医科大学・医学部・教授

研究者番号：80217926

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、中英語における時空間体系を歴史語用論の視点から体系的に分析する初めての試みである。時空間体系を定義した上で、時制や人称代名詞といった時空間に関する要素が利用される頻度を分析した。また、ディスコースに踏み込んだ分析を行い、時空間の要素やファクターが統合された時空間体系において相互にどのように関連しているのか、また、談話においてどのように展開するのかについて検討した。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research project was to conduct a first systematic analysis of the spatio-temporal systems in Middle English along the lines of historical pragmatics. After constructing a definition of the spatio-temporal systems, I conducted a statistical analysis of how frequently the elements of space and time, such as tenses and pronouns, are employed in both spatial and temporal domains. My investigations into discourse showed how these elements and factors are related with each other in an integrated spatio-temporal domain and how these relationships change in discourse.

研究分野：人文学、言語学、英語学

キーワード：英語史 時空間体系 中英語 歴史語用論

## 1. 研究開始当初の背景

我々の世界ではさまざまな事象が生起しており、どの事象をとらえて言語化するのかに話者は責任を負っている。ある文脈を切り取ってみると、話者はある特定の要素、すなわち、代名詞(I, he, she など)、指示詞(this, that など)、副詞 (here, there など)、時制形式 (単純現在、単純過去など)、そして法助動詞 (shall, will など) を使用していることがわかる。これらの要素を使用するにあたり、自分のいる場所である「いま・ここ」から事象がどの程度離れているのかをその都度判断し、その関係をこういった時空間の要素によって表現しているのである。時空間の要素とはどのようなものだろうか。時空間の要素はどのように関連しあっているのだろうか。さらに、こういった時空間の要素の関係が、談話においてどのように変化するのだろうか。特に歴史的なデータにおいて、時空間体系はどのようなものであったのだろうか。こういった問いに答えるのは、まさに歴史語用論の役割である。

実は、時空間の要素を統合して分析を行う試み自体は新しいものではない。「時空間」という用語を歴史的なデータに初めて用いたのは Traugott(1974)であった。その後 Fries (1994)、Taavitsainen (1999)、Nagucka (1996)などがこの用語を使わずに時空間に関連した分析を行っているが、歴史的データにおける時空間体系を体系的に分析したものは見当たらない。

そこで、研究代表者のこれまでの時間体系に関する研究を拡大・発展させる形で、研究の目的を設定することにした。

## 2. 研究の目的

本プロジェクトの目的は、中英語 (Middle English) における時空間体系 (spatio-temporal systems) を歴史語用論 (historical pragmatics) の視点から体系的に分析することである。中英語 (1100年頃-1500年頃) の共時的なデータを分析し、この時代の時空間体系がどのようなものであったのかについて分析した。

分析にあたっては、語用論的な分析において特に重要である話者と発話の状況「いま・ここ」を中心にとらえる話者基準的な見方 (ダイクシス) を導入した。すなわち、話者はその時点からみて、物や事象が時間的、空間的、社会的、心理的にどの程度離れているのかを判断して言語表現を選択している。この見方こそが、時空間体系を分析するうえで決定的な役割を果たすのである。

分析の対象とした時空間の要素は次のとおりである。

- (1) 空間体系の要素  
代名詞、指示詞、副詞 (類)

- (2) 時間体系の要素

時制 (形式)、法助動詞、副詞 (類)

- (3) 時空間体系の要素 (空間体系、時間体系両方に関わる要素)

間投詞

- (4) その他、関連する要素

呼びかけ語、談話を組み立てる要素 (メタディスコースなど)、命令法など

時空間の要素を話者に近いことを表す近称 (proximal) と遠いことを表す遠称 (distal) とに分類して、どちらの視点をとる傾向があるのかについて分析を行った。

研究代表者の行ってきた研究の特長であるが、統語論的、意味論的、語用論的なファクターを明確に区別した。

- (1) 統語論的なファクター (形式)

- (2) 意味論的なファクター (モダリティ、時制)

- (3) ミクロ語用論的なファクター (言語行為)

- (4) よりマクロな語用論的なファクター ((イン) ポライトネス、会話、談話、社会的・文化的なファクター)

- (5) その他 (感情)

## 3. 研究の方法

本研究プロジェクトは、過去における言語使用やその歴史的発達、そしてその原理を研究課題とする歴史語用論の趣旨に沿ったものである (Taavitsainen and Jucker 2010)。この分野においては、二つの対応付け (マッピング) の方向が想定されている (Jacobs and Jucker 1995)。

- (1) 言語形式に着目してそれに対応する機能を分析する「形式-機能の対応づけ」

- (2) 機能に着目してそれに対応する言語形式を分析する「機能-形式の対応づけ」

本研究プロジェクトにおいては、この二方向の対応づけを採用した。時空間体系という極めて広範な領域をターゲットにしているため、「機能-形式の対応づけ」はある程度犠牲にせざるをえなかった。しかし、時制などは形式と機能が一致するとは限らないことから、このような場合には「機能-形式の対応づけ」が威力を発揮した。

また、時空間体系の分析を研究の目標とした点、対応づけを二方向にするという方法論を採用した点から、コーパスの範囲を絞って綿密な分析を行う必要があった。使用したコーパスは次のとおりである。

- (1) *The Riverside Chaucer* (Benson 1987); concordance by Oizumi (1991-2012)

- (2) *The Paston Letters and Papers of the*

*Fifteenth Century, Part I* (Davis 2004[1971])

チャーサーに関してはリヴァーサイド版のテキストを使用し、それに準拠したコンコードダンスを補助的に使用した。また、パストン家書簡集に関しては、Davis の編纂したテキストのうち、Part I のみを使用し、コンコードダンスは使用しなかった。これに1節で述べた先行研究の分析の結果を取り入れた。

なお、研究代表者は、国際学会参加などの機会を捉えて国内外の研究者との交流を行った。特にヤツェック・フィシャック教授(アダム・ミツケビッチ大学) から得られたレビューは大きな収穫であった。

#### 4. 研究成果

三年にわたる研究により、歴史的なデータにおける時空間体系を統一的・体系的に分析したことは、他に類をみないものであり、歴史語用論の発展に貢献したものと確信している。

本研究プロジェクトは、次の点において特に大きな意義があったと考えられる。

- (1) 初めて歴史的なデータにおける時空間体系を統一的にとらえて分析したこと
- (2) 歴史語用論の立場から理論的・実証的に時空間体系を分析したこと
- (3) 混同されることがしばしばある統語論的・意味論的・語用論的ファクターを明確に区別して分析を行ったこと
- (4) 「形式-機能の対応づけ」「機能-形式の対応づけ」の二方向からアプローチし、綿密な分析を行ったこと
- (5) ミクロなファクターのみならず、よりマクロな次元に踏み込み、談話における時空間体系の分析を行ったこと

次に本研究プロジェクトの顕著な成果として、次の点をあげておく。

(1) 時空間体系の定義  
基本的にはダイクシスの体系であり、話者の「いま・ここ」を中心として、その時点からの程度離れているかを話者が判断し、近称か遠称の要素を選択する。時空間体系を構成する要素を特定し、近称/遠称(場合により三分法)の要素に分類した。また、時空間体系は空間体系と時間体系を足したのではなく、統合された体系であり、談話の進展に従って変化するものであることを定義づけた。

(2) アストロラーベ論の時空間体系  
アストロラーベ論(*A Treatise on the Astrolabe*) (散文)は、チャーサーが10歳の息子に天体観測に使用するアストロラー

ベの構造や使用法について説明するという内容である。科学的な文献であるということに加えて、目の前にいる人物に語りかけるという設定のため、総じて近称の要素の割合が高く、間主観的な要素(二人称代名詞など)も頻繁に用いられる。談話の分析では、時空間の要素とその他の要素(テキスト・ダイクシスの要素 *forseide* など)とのよくある組み合わせ、ディスコース・マーカ(*now* など)、メタディスコース(*that is to seyn* など)などの談話を組み立てる要素に注目した。また、統合された時空間の体系において、近称または遠称の要素が組み合わせさず、いずれかのパースペクティブを構成したり、そのパースペクティブが談話において交替したりする様子を分析した。

(3) カンタベリー物語の時空間体系  
カンタベリー物語(*The Canterbury Tales*)は、カンタベリー大聖堂への巡礼の道中、それぞれが自分の知っている話を順に語るという物語である。物語全体の語り手、下の階層にそれぞれの話の語り手、そのさらに下に話の登場人物がおり、複雑な構造となっている。アストロラーベ論と比較して、遠称の要素がより多く使用されている。談話の分析においては、談話を組み立てる要素の分析に加えて、近称または遠称の要素の組み合わせによるパースペクティブの構成やその交替についても分析を行った。カンタベリー物語においては、空間の要素はそのまま、時間の要素(時制)がダイナミックに交替する様子が見え、話者の性や社会的身分といった社会言語学的なファクターと時空間体系との関連、また、チャーサーと同時代の人々の実際の生活、すなわち、天文学や占星術と言語における時空間体系との関連についても、カンタベリー物語などをもとに分析を行った。

(4) パストン家書簡集の時空間体系  
パストン家書簡集(*The Paston Letters*)は、15世紀から16世紀初頭におけるノーフォーク地方のパストン家の手紙や文書を集めたものである。本研究プロジェクトでは、書簡のみを分析の対象とした。書簡は離れている相手に宛てたものであるため、近称の要素に加えて二人称の代名詞の割合が高くなっており、また、様々なダイクシス的な副詞が用いられている。また、二人称代名詞のなかでも、th-形式ではなく、(極めて大まかに言って、より改まった) y-形式の割合が圧倒的に高いのが特徴である。談話における時空間体系に関しては、談話を組み立てる要素の出現率が少なく、近称と遠称のパースペクティブの交替がそれほどダイナミックでないことが明らかになった。

次の節に学会発表等のリストを掲げておくが、準備中、審査中の論考もあるため、今

後も研究成果を社会に発信していく努力を続けていくつもりである。

最後に、本研究プロジェクトは、コーパスの範囲を絞って中英語の時空間体系そのものを分析することに主眼をおいてきた。今後の研究課題として、空間の領域から時間の領域への意味の変化、さらに別のタイプのテキストにおける時空間体系、また、他の時代の時空間体系などがあげられる。さらに研究をすすめる、過去におけるコミュニケーションがどのようなものであったのかに迫ってきたい。

Benson, Larry D. (ed.) 1987. *The Riverside Chaucer*. 3rd edition. Boston: Houghton Mifflin Company.

Davis, Norman. 2004[1971]. *Paston Letters and Papers of the Fifteenth Century*, Part I. Oxford, etc.: The Early English Text Society/Oxford University Press.

Fries, Udo. 1994. "Text Deixis in Early Modern English", in: Dieter Kastovsky (ed.), *Studies in Early Modern English* (Topics in English Linguistics 13), Berlin and New York: Mouton de Gruyter: pp. 111-128.

Jacobs, Andreas and Andreas H. Jucker. 1995. "The Historical Perspective in Pragmatics", in: Andreas H. Jucker (ed.), *Historical Pragmatics: Pragmatic Developments in the History of English*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins Publishing Company: pp. 3-33.

Nagucka, Ruta. 1996. "Spatial Relations in Chaucer's 'Treatise on the Astrolabe'", in: Jacek Fisiak (ed.), *Middle English Miscellany: From Vocabulary to Linguistic Variation*. Poznań: Motivex: pp. 233-244.

Oizumi, Akio. 1991-2012. *A Complete Concordance to the Works of Geoffrey Chaucer*. Hildesheim, Zurich and New York: Georg Olms Verlag.

Taavitsainen, Irma. 1999. "Personality and Styles of Affect in the *Canterbury Tales*", in: Geoffrey Lester (ed.), *Chaucer in Perspective: Middle English Essays in Honour of Norman Blake*, Sheffield: Sheffield Academic Press: pp. 218-234.

Taavitsainen and Jucker. 2010. "Trends and Developments in Historical

Pragmatics", in: Andreas H. Jucker and Irma Taavitsainen (eds.), *Historical Pragmatics* (Handbooks of Pragmatics 8), Berlin and New York: De Gruyter Mouton: pp. 3-30.

Traugott, Elizabeth Closs. 1974. "Explorations in Linguistic Elaboration: Language Change, Language Acquisition and the Genesis of Spatio-temporal Terms", in: John Mathieson Anderson and Charles Jones (eds.), *Historical Linguistics, Volume 1: Syntax, Morphology, Internal and Comparative Reconstruction: Proceedings of the First International Conference on Historical Linguistics, Edinburgh, 2nd-7th September 1973* (North-Holland Linguistics Series 12a), Amsterdam and Oxford: North-Holland Publishing Company: pp. 263-314.

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 0件)

[学会発表] (計 9件)

1. Nakayasu, Minako. "Spatio-temporal systems in Margaret Paston's Letters". 9th International Conference on Middle English (ICOME 9), Philological School of Higher Education, Wrocław, Poland. 2015年5月1日.

2. 中安美奈子. 「時空を遡る一コーナーの時空間体系を分析して」第13回ひとことばフォーラム特別公開研究会「言語、言語意識の変容」学習院大学, 2015年3月22日.

3. Nakayasu, Minako. "How Did Chaucer Regulate Space and Time? Pragmatic Analysis of Middle English Spatio-temporal Systems". 17th World Congress of the International Association of Applied Linguistics (AILA World Congress 2014), Brisbane Convention & Exhibition Centre, Brisbane, Australia. 2014年8月11日.

4. Nakayasu, Minako. "Spatio-temporal Systems in Chaucer". 18th International Conference on English Historical Linguistics (ICEHL-18), KU Leuven, Leuven, Belgium. 2014年7月14日.

5. Nakayasu, Minako. "*Weep Now Namooore: I Wol Thy Lust Fulfille*: Towards a

Sociopragmatic Analysis of the Spatio-temporal Systems in Chaucer” . 1st Poznań Historical Sociopragmatics Symposium, Adam Mickiewicz University, Poznań, Poland. 2014年5月15日.

6. Nakayasu, Minako. “Pragmatic Analysis of the Spatio-temporal Systems in Chaucer’s Prose” . 12th Hamamatsu Medical Symposium, Hamamatsu University School of Medicine, Hamamatsu. 2014年3月7日.

7. Nakayasu, Minako. “Chaucer’s Sky: Space, Time and the Astrolabe” . 12th Medieval English Studies Symposium (MESS 12), Adam Mickiewicz University, Poznań, Poland. 2013年12月1日.

8. Nakayasu, Minako. “Spatio-temporal Systems in *A Treatise on the Astrolabe*” . 8th International Conference on Middle English (ICOME 8), University of Murcia, Murcia, Spain. 2013年5月3日.

9. Nakayasu, Minako. “*Shrighte Emelye, and Howleth Palamon*: Tense Alternation in Chaucer” . 17th International Conference on English Historical Linguistics (ICEHL-17), University of Zurich, Zurich, Switzerland. 2012年8月21日.

[図書] (計 1件)

1. Nakayasu, Minako. “Spatio-temporal Systems in *A Treatise on the Astrolabe*” , in: Juan Camilo Conde-Silvestre and Javier Calle-Martín (eds.), *Approaches to Middle English: Variation, Contact and Change* (Studies in English Medieval Language and Literature 47), Frankfurt am Main, etc.: Peter Lang: pp. 243-259. [査読有]

[産業財産権]

○出願状況 (計 0件)

○取得状況 (計 0件)

[その他]

なし

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

中安 美奈子 (NAKAYASU MINAKO)

浜松医科大学・医学部・教授

研究者番号：80217926

### (2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし